様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４４１４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１７４１３

研究課題名（和文）多文化共生を目指した幼小連携多文化音楽学習アプローチの開発

研究課題名（英文）Development in Kindergarten and Elementary School Cooperate Multicultural Music Learning Approach for Multicultural Coexistence

研究代表者
峯　恭子（Mine, Kyoko）

大阪大谷大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０６１１１８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，多文化音楽教育を先駆的に行っている米国及びオーストラリアに着目し，音楽カリキュラムや現地の様々な事例を分析・検討することによって，その学習内容及びアプローチ方法を明らかにした。
その結果，米国における全米コア音楽標準（2014）では，”多文化”という視点が直接的に明記されることがなくなった点や，メタ的に音楽を評価し，音楽をその目的や文脈から捉えることを重視している点が明らかになった。また，オーストラリアでの実践分析，及びカリキュラム分析の結果，音楽的な理解を伴った音楽経験を一貫して思考している点や，人間性のレベルにおいての音楽的能力の育成を目指している点が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the United States and Australia where conduct pioneering education on multicultural music education, this research revealed the learning contents and approach methods by analyzing and reviewing the music curriculums and various local practices.
As a result, it became clear that the National Core Arts Standards (2014) in the United States has no longer specified the viewpoint of “multicultural” directly but evaluates music metaphysically and emphasizes grasping a music from its intention and context. And, through practice analysis and curriculum analysis in Australia, it was found that the curriculums consistently thinks musical experiences accompanied by musical understanding and aims to nourish musical ability in the level of human nature.

研究分野：音楽教育

キーワード：音楽教育　多文化音楽教育　幼小連携

１．研究開始当初の背景

学校教育が抱える課題の１つとして「国内外の文化、文明、価値及び生活様式に関する理解と尊重」が挙げられる。中央教育審議会による第８回教育振興基本計画部会（平成 28 年 10 月４日）で示された「第３期教育振興基本計画」では、「第２期教育振興基本計画」を踏まえたうえで、今日のグローバル化に対応して「グローバル社会やイノベーションを牽引する高度人材の育成」が引き続き求められている。その内容として外国語教育の抜本的強化や、留学支援等の国際化に向けた支援が挙げられており、「社会を生き抜く力」に加えて、グローバル社会にあって様々な人々と協働できる人材、とりわけ国際交渉など、国際舞台で先導的に活躍できる人材を養成することが今後の成果目標として示されている。

このような課題の解決に向けて、近年わが国においても多文化教育に関する実践に注目が集まっており、特に音楽教育においては米国を中心に多数の多文化学校教育の分析・実践がわが国へ紹介されている。一般的に多文化音楽教育は、「音楽の学習を通して、文化的マイノリティの視点に立ち、社会的公正という立場から多様な人種、民族、文化集団の共存・共生を目指す教育」であると言われており、学習者の文化アイデンティティの育成を目指していることからも、これからのわが国において重要な教育の視点になり得ると考える。

一方で、理論研究と開発研究には大きな乖離がみられることに加えて、幼児期からの多文化音楽学習の方法に関してはこれまでほとんど研究が行われていない。この問題には３つの要因がある。第１は、音楽を媒介とするが故に、音楽の本質を学習する側面と、文化や他者理解といった側面をどのように融合するか、その方法や目的が不透明であること。第２は、多文化音楽教育が、その国や地域固有の文化的・社会的背景に即して実践されているため、わが国への直接的な導入が困難であること。第３は、前述した２つの理由から、開発研究に際し教育内容を固定化することが困難なことである。そのため授業やカリキュラムの開発を行う際、以下の先行研究のように日本固有の文化的・社会的背景に即さない、諸外国の実践を模倣した学習に留まってしまうのである。

以上より、諸外国における多文化音楽教育をわが国の教育実践へ還元するための研究を行うには、まず、幼児期から多文化音楽教育が行われている国・地域等の文化的・社会的背景と教育カリキュラムを複合的に分析すること、またそれらを踏まえて、実際の保育内容・学習内容及びアプローチ方法を明らかにする必要がある。

２．研究の目的

これまで、主に２つの側面から米国における多文化音楽教育の研究を行ってきた。第１は音楽科教育で行われている文化認識に関する理論的枠組みの分析研究、第２は理論と実践の間にある乖離の歴史的変容に関する研究である。その結果、第１に多文化音楽教育が有する学問的・教育的・社会的背景、第２に音楽教育における多文化音楽教育の位置付けが明らかとなった。

本研究では、従来の研究を発展させ、以下の２点を明らかにすることを目的とする。

（1）幼児期からの多文化音楽教育を理論的に成立させている米国のスタンダード及び音楽カリキュラムの分析を行い、その特徴及び諸相を明らかにする。

（2）幼小連携の視点から音楽教育を行っているフィンランドや、多文化国家であるオーストラリアの実践を幼少連携の視点から分析・検討することによって、体系的な多文化音楽教育カリキュラム及びその学習アプローチの構造を明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、諸外国の幼児期からの体系的な多文化音楽学習のアプローチ方法及びカリキュラム構造を明らかにするものである。そのための方法として、理論的側面だけではなく、実践的側面の両側面から、以下の方法で研究を進める。

（1）先駆的に多文化音楽教育を行っている米国の音楽教育スタンダードや、授業計画案等の分析・検討を行い、理念的枠組みの特徴を明らかにする。

（2）多文化共生を目的として保育実践を行っているオーストラリアの Bulimba State School を訪問・見学し、実践調査を行う。目的は、保育・教育環境及び教育内容の調査、カリキュラムの調査・分析であり、幼小連携の多文化音楽学習アプローチを考案する示唆を得ることである。

４．研究成果

本研究では、多文化音楽教育を先駆的に進めてきた米国を対象として、最新の音楽教育スタンダードの分析・検討、また多文化共生を目的として保育実践を行っているオーストラリアの Bulimba State School での実践及び音楽カリキュラムの調査・分析を進めてきた。その結果、以下の点が明らかとなった。

（1）米国における「全米コア芸術標準（2014）」にみる音楽教育カリキュラム

①「全米コア芸術標準（2014）」の構成の特徴

全米芸術教育標準の策定から約 20 年が経過するなかで、批判的思考や問題解決、コミュニケーション、協同、創造性、情報リテラシー、社会性、異文化理解能力等の 21 世紀型スキルに対応する標準の策定が進められてきた。その新たな標準として 2014 年６月に改訂されたのが「全米コア芸術標準

(National Core Arts Standards)」である。全米芸術教育標準が技能や知識を中心に構成されていたのに対して、全米コア音楽標準では、継続的な理解力と自立した音楽活動を重視した幅広い音楽リテラシーの獲得を中心として構成されていることが特徴として挙げられる。また、行動や活動を重視するこれまでのスタンダードから、思考や認知のプロセスに着目し、音楽をその目的や文脈から捉えることを重視するものに変更された。そのため、パフォーマンス標準や評価手順における学習内容では、表現の質という記述は出てくるものの、実際に聴取力や識別力等のスキルのコンテンツが含まれることが少なくなっていた。

さらに、全米芸術教育標準の場合は、他の芸術との関連を図る「内容標準 8」や、歴史や文化等との関連を図る「内容標準 9」が設定されており、多文化的な視点が明記されていたが、全米コア音楽標準の場合は、「関連性」という芸術プロセスのカテゴリーが新設され、その他の芸術プロセスや、他の芸術領域や日常生活とどのように関連しているのかを追求する項目として位置づけが変化した。この変更によって、多文化的な視点が直接的に明記されることはなくなり、活動標準の個々の内容に文化や歴史に関する内容が適宜記載されることとなった。

以上のような構成の変更によって、前標準である全米芸術教育標準に設定されていたようなレパートリーや楽器、ジャンルや様式を観点に音楽を理解するという発想も弱まっている。一方で、思考や判断のプロセスに着目している点や、音楽の置かれた文脈に照らした適切性を判断するプロセスが取り入れられていることは、メタ的に音楽を評価しようとする全米コア音楽標準の新しい特徴と言える。

②「全米コア芸術標準（2014)」に基づく音楽学習の特徴

全米コア芸術標準は、冊子媒体であった旧標準とは異なり、ウェブサイト上に様々な情報が公開されている。そのなかに、Music Model Cornerstone Assessments（Grade2 及び Grade5）のページが設けられており、4 つの芸術プロセスのうち活動のまとまりである「創造」、「演奏」、「反応」における評価手順とその方法が示されている。したがって本研究では、全米コア音楽標準の内容、及び Music Model Cornerstone Assessments の分析を通して、全米コア音楽標準の構成から明らかになった判断力や批評力の活用といった観点が、如何なる方法で音楽学習の内容に反映されているのかを明らかにし、全米コア音楽標準においてどのような音楽的能力を育成しようとしているのかを検討した。その結果、次の 3 点が特徴として挙げられる。

1 点目は、フィードバックを利用した学習方法である。評価手順では、頻繁に他者からのフィードバックを利用しており、その他の芸術プロセスにおいても、ペアでの活動を多用するなど協働的活動が多く含まれている。このような活動によって、自分自身の活動をメタ的に評価することにも繋がっており、音楽の内容や解釈だけではなく、目的や関心から音楽をメタ的に評価する活動へと発展している。

2 点目は、客観的な評価が可能な学習の展開である。これは、学習者、教師の両側面で指摘することができる。例えば「創造」での活動の場合、学習のなかで表現に至るまでの過程をワークシートに記録することで、学習者が自分自身、また他者同士で客観的に表現を振り返ることが可能になっている。また、教師が使用する採点表の例では評価項目が明示され、学習者の表現を一定の基準のもとで評価する仕組みが提示されている。記録方法は多岐に渡るが、多くの活動のなかで後にフィードバックや評価に使用できるよう録画や録音によって学習の記録を残すよう提案されている。

3 点目は、思考や判断のプロセスに着目した学習手順である。学習資料として掲載されているワークシートの例では、その多くが記述式となっており、即興や作曲を行うにあたり、なぜそう思うのか、もしくは思わないか、またどのように計画したのか、またなぜそのようにしたのか等、非常に具体的に質問項目が設定されている。また選択項目であっても、例えば音楽の諸要素が細かく項目として設定されているなど、詳細に学習の道筋を記録するような工夫が施されている。つまり、教師が評価を客観的に行うことができるだけでなく、学習者自身が、表現を行うまでの思考や判断の道筋を振り返ることも可能となっているのである。

(2) オーストラリアの Bulimba State School における音楽カリキュラムの特徴

QLD 州の州都ブリスベン郊外にある Bulimba State School は、1866 年に開校された歴史ある学校である。同校の特徴として、環境教育や 2001 年に開始された Stephanie Alexander Kitchen Garden Program を導入しており、デモンストレーションスクールとして様々な実践を行なっていることが挙げられる。また、語学、体育、音楽教育に関しては専門的知識を有した教員が授業を担当しており、より専門性の高い授業が行なわれている。

①Bulimba State School の音楽教育カリキュラムの特徴

Bulimba State School の音楽教育カリキュラムの特徴として、次の 3 点を指摘することができる。

第 1 に、基本的には音楽リテラシーを中心としたカリキュラム構成になっていることである。“感じる”や“味わう”といった抽象的な表現ではなく、音楽を構成している諸

要素を軸に音楽を理解しようとする方向性を有している。つまり、音楽の基礎・基本をベースにした音楽学習が想定されているのである。一方で、本カリキュラムでは和声や音階等、難易度が高い学習内容も設定されており、西洋のクラシック音楽に関する能力と同じ能力を音楽科教育に求めているとも言える。

第2に、音楽的な理解を伴った音楽経験を一貫して志向していることである。本カリキュラムでは、学習したことを作曲や実際の演奏を通して生かすことが求められていた。つまり、単に知識として音楽を学習するのではなく、最終的に自分自身で表現として表出することが音楽をするうえで重要だと考えられているのである。

第3に、人間性のレベルにおいての音楽的能力の育成を行なっていることである。例えば、音楽の価値判断の側面に関しては、演奏表現に関する価値判断力や、演奏解釈に対する価値判断力、作品に対する価値判断力等、様々な場面で音楽を色々な視点から判断することが求められている。また、態度的な能力として、自己発見や自己表現、音楽的意識の有無等、音楽を通して人間性の育成をも期待していることが分かる。一般的に音楽科教育というのは、専門家を育てるための教科ではない。したがって、本カリキュラムにおいても、あくまでも人間形成の一部として鑑賞や音楽表現が能力化されていることが指摘できる。

②幼小連携の視点からみる Bulimba State School の音楽教育実践の特徴

今回の視察では、小学校の準備段階にあたる Prep クラス、及び Year1 の音楽活動を見学することができた。活動内容は歌唱、器楽が主となっており、1クラス 30 分、20～25 名で音楽活動を行っている。Prep 及び Year1 の授業実践の特徴として、第1に、音環境に十分な配慮がなされていること、第2に、感覚教育に重点が置かれていること、 第3に、音楽の基礎・基本が活動のベースになっていること、の3点を指摘することができる。また、多文化的な視点として、授業のなかでオーストラリア先住民の楽器を導入したり、様々な国の音楽を学習する等、子どもたちが楽しく様々な文化に触れることができるような工夫がなされていた。

このような実践の基となる、Prep 及び Year1 の音楽カリキュラムの特徴としては、次の3点が挙げられる。

第1に、無意識的な音楽の学びから意識的な音楽の学び及び表現へと発展していることである。Prep の段階では経験や体験を中心にカリキュラムが組まれており、無意識的に様々な音楽的活動を行うなかで、例えば音色の違いや音の高低等を識別していた。それが Year1 以降になると、様々な音楽的知識や諸要素と関連付けて学習を進めることによって、これまでの学びが知識として獲得されるのである。

第2に、音楽表現を通して自己肯定感や他者受容感を育成しようとしていることである。これは、Prep の段階から行われている。例えば、大好きな音楽を理由とともに述べることが活動の 1 つとして提案されているが、これは他者の考えを受け入れること、さらには他者の音楽を受け入れることへと繋がっていく。多文化社会であるオーストラリアでは、こうした様々な教科での学びが他者受容感や自分とは異なる文化を受容する素地をつくっていくのであろう。

第3に、音楽的な理解に基づいた音楽経験を重視していることである。本カリキュラムでは、Prep の段階から音楽の諸要素に着目した活動が提案されているが、本研究を行うにあたり視察を行った際、Prep での学びが Year1 の授業のなかで多様な形で発展している様子を見て取ることができた。Prep で単に遊びに終始するのではなく、例えば音楽ゲームをしながらも、このような音楽的能力を育成したいという教師側の明確な意図が垣間みえた。このような学習によって、Year1 以降の学習へ円滑に接続することができるのであろう。一方で、音楽活動を通して子どもに獲得させたい音楽的能力がカリキュラムには具体的に記載されていない。したがって、このカリキュラムをベースに教員が内容やねらいを考える必要があり、教科書も特に指定はなく教材は教師側が選択をするため、音楽活動の質は教師の力量に関わってくるという側面もある。

以上より、Bulimba State School の音楽カリキュラムが、活動内容や教育の方法だけを重視したカリキュラムではなく、子どもたちの到達すべき目標の視点で作成されていること、また情緒的・印象的な表現で表されていた子どもの状況をより客観的な視点で示しているという点は、我が国の幼小連携の音楽活動を考える際の示唆となり得るであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　4　件）

①峯恭子、オーストラリアにおける Bulimba State School の音楽教育カリキュラムに関する一考察、大阪大谷大学教育学部『幼児教育実践研究センター紀要』査読無、7巻、2017、63-73
②峯恭子、全米コア音楽標準（2014）に基づく音楽学習に関する一考察－Model Cornerstone Assessments（Grade2）の分析を中心として－、中国四国教育学会『教育学研究起用（CD-ROM 版）』査読無、62巻、2016、304-309
③峯恭子、幼小連携の視点からみるオースト

ラリアにおける Bulimba State School の音楽教育カリキュラム、大阪大谷大学教育学部『幼児教育実践研究センター紀要』査読無、6 巻、2016、11-20
④峯恭子、全米コア音楽標準（2014）にみる構成の特徴－全米芸術教育標準（1994）との比較を通して－、中国四国教育学会『教育学研究起用（CD-ROM 版）』査読無、61 巻、2015、258-263

〔学会発表〕（計　5　件）
①峯恭子、全米コア音楽標準（2014）に基づく音楽学習に関する一考察－Music Model Cornerstone Assessments（Grade２）の分析を中心として、2016 年 11 月 5 日、鳴門教育大学（徳島県、鳴門市）
②峯恭子、全米コア音楽標準（2014）に基づく音楽学習に関する一考察－Music Model Cornerstone Assessments（Grade5）の分析を中心として－、2016 年 8 月 25 日、九州女子大学（福岡県、北九州市）
③峯恭子、幼小連携に着目した音楽教育カリキュラムに関する一考察－オーストラリアにおける Bulimba State School の実践を中心に－、第 69 回日本保育学会、2016 年 5 月 7 日、東京学芸大学小金井キャンパス（東京都、小金井市）
④峯恭子、全米コア芸術標準（2014）にみる構成の特徴－全米芸術教育標準（1994）との比較を通して－、第 67 回中国四国教育学会、2015 年 11 月 14 日、 岡山大学（岡山県岡山市）
⑤峯恭子、フィンランドのサウナラハティ校にみる幼児音楽教育、第 68 回日本保育学会、2015 年 5 月 10 日、椙山女学園大学（愛知県名古屋市）

〔図書〕（計　1　件）
①長瀬美子、田中伸、峯恭子、風間書房、幼小連携カリキュラムのデザインと評価、2015、99-121

６．研究組織
(1)研究代表者
峯　恭子（MINE, Kyoko）
大阪大谷大学・教育学部教育学科・准教授
研究者番号：90611187